広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XXII・XXIII 2011. 3. 22

# Keith Swanwick の Appraising 観に関する研究

梅比良 麻 子
（本講座大学院博士課程前期在学）

## A Study on Keith Swanwick's View of the Appraising

Asako UMEHIRA

## I はじめに

イギリスでは，1992年にナショナルカリキュラム音楽（Music in the National Curriculum）が導入され，法的拘束力をもった音楽教育が行われるようになった。カリキュラムは子どもの年齢によって4つのキーステージに分けられ，音楽科では，ステージ1（5歳～7歳），ステージ2（7歳～11歳），ステージ3（11歳～14歳）までは必修教科でカリキュラムが存在するが，ステージ4（14歳～16歳）は選択教科となっているためにカリキュラムは存在しない。現在に至るまで，1995年，1999年，2007年（中学校のみ）の3回にわたる改訂が行われている。初版のナショナルカリキュラム音楽導入にあたり，その学習内容の多さと過度の専門性に批判の声が上がったが，その他に，これまでの音楽教育界に馴染みのないAppraisingという専門用語が生み出されたことは注目すべき点である。ナショナルカリキュラム音楽において，Appraisingは，生徒に求められる技術，知識，理解を示す到達目標の1つに規定された。

到達目標1：Composing and Performing

到達目標2：Listening and Appraising

Appraisingは，ナショナルカリキュラム音楽の草案を提案するための機関であるMusic Working Group（以下，MWG）によって採用された用語であるが，MWGのメンバーの1人であるGeorge Prattはこれについて以下のように述べている[1]。

「当時必要とした用語は，積極的聴取（考えたり，感じたり，実際に行うことによって，真に何かを聴き，それに反応すること）を意味するものであった。」

つまり，MWGは，これまでに使用されなかった用語を用いることで，従来の消極的聴取とは異なる，積極的聴取の意を強調しようとしたのである。しかし，その定義づけが不十分であったのに加え，教育省大臣の要求を受けて，諮問機関であるNational Curriculum CouncilがMWGの草案に修正を加えたこともあり，Appraisingは，不必要に混乱させるものとしていくらか批判を受けた。また，Listeningという言葉と併用されることによって，さらなる混乱を招いたとも指摘されている[2]。一方で，Appraisingの採用は，授業における聴取の発展に貢献したとして評価もされている[3]。では，Appraisingはどのように受け取られ，イギリスの音楽教育においてどのような意味をもつのだろうか。

ナショナルカリキュラム音楽に関する研究は多々あるが，井本（1996）は，ナショナルカリキュラム音楽の作成から法案に至る経緯について，一般の反響を交えながら明らかにしている[4]。そして，Appraisingを，他の到達目標と並べて提示することは矛盾しているという考察を行っている。Pittsは，イギリスにおける音楽教育の歴史的考察を行い，その中でナショナルカリキュラム音楽を概観している[5]。高須・塩原（2003）は我が国の音楽科学習指導要領との比較を交えながら，第2次改訂のナショナルカリキュラム音楽（1999）の特質を述べている[6]。塩原・高須（2004）は，ナショナルカリキュラム音楽の改訂を概観し

ている[7]。これらの研究ではAppraisingに触れているものの，カリキュラムにおけるAppraisingを研究の主眼としてはいない。なお，これらの研究では，Appraisingを「評価」や「価値判断（鑑賞）」と翻訳しているが，本研究では，Appraisingという用語を採用したMWGの意図を考慮し，原語で扱うこととする。イギリスにおけるAppraisingに関わる資料としては，MWGの一員であるGeorge Pratt率いるResearch into Applied Musical Perception（以下，RAMP）が，現場の教師の協力のもと，Appraisingの定義づけを試みている[8]。また，1995年にMWGによって出版されたガイドブック*Teaching Music in the National Curriculum*[9]は現場の教師に反響を与えたとされるが[10]，MWGはその中でナショナルカリキュラム音楽におけるAppraisingに対する見解を述べている。

これまで，上記の資料により，RAMPの研究とガイドブックにおけるMWGのAppraisingの解釈について考察したが，双方に若干の違いが見られた[11]。これに加え，イギリスの音楽教育学者であるKeith Swanwickは，ナショナルカリキュラム音楽作成に影響を与えたとされることから，彼のAppraisingに対する見解を明らかにすることは有意義であると思われる。

本稿では，MWGの本来のAppraisingを採用した意図とその概要を押さえた上で，それに対するSwanwickの見解はどのようなものであったのかについて明らかにすることを目的とする。

## Ⅱ　Music Working Groupの最終報告書におけるAppraising

### (1)ナショナルカリキュラム音楽の成立過程

ナショナルカリキュラム作成は以下の手順で行われた。

- Music Working Groupによる中間報告書の作成
- Music Working Groupによる最終報告書の作成
- National Curriculum Councilによる審議報告書の作成
- ナショナルカリキュラム音楽の制定

各報告書の作成は，教育省長官の要求と一般の人々の反応や批評を参考としながら発展させながら行われた。

### (2)Music Working Groupの最終報告書におけるAppraisingに関する見解

Appraisingは，Music Working Groupによる最終報告書によって採用された後，National Curriculum Councilによる審議報告書へと引き継がれ，法案化されたカリキュラムにも採用されたが，MWGの真意に必ずしも沿わない修正が加えられている。このことから，Appraisingの採用に関する本来の意図，概要をおさえるため，MWGの最終報告書[12]におけるAppraisingを研究の対象とする。

MWGの最終報告書において，以下の3つの到達目標のうち，Appraisingは3番目に位置するものとして提示された。

到達目標1：Performing
到達目標2：Composing
到達目標3：Appraising

MWGが，Appraisingを採用した経緯について以下に述べる[13]。

MWGは，中間報告書の構造を再検討するにあたり，聴く（Listening）という能力の重要性について言及している。MWGは，音楽との関わり方を，演奏者，作曲者，聴衆という3つの役割として捉え，聴く（Listening）という行為を全ての音楽的活動における主要な活動であると位置づけている。そして，その根拠として，「演奏」，「作曲」，「聴衆としての聴取（Listening in audience）」の3つの活動におけるListeningの性質を述べている。各活動におけるListeningの性質は以下に集約される。

**演奏**

ここでのListeningは，音程，速度，全体的効果の精密さを得るための本質的要素である。

**作曲**

ここでのListeningは，特定の効果について判断するために，実際に聴くことや，想像の中で聴くこ

とである。

**聴衆としての聴取**

ここでの Listening は，生の音，もしくは録音された演奏を聴くことであり，同様に，認識，識別，批判的反応，評価の概念を伴う。

到達目標として，聴衆としての聴取（Listening in audience）という名称を Appraising に改名した意図に関しては，単に音楽に注意を向けるという性質だけでなく，音楽の解釈や評価をするために美的要因を取り込むことを含むことを示すためであるとしている。これによって，積極的聴取の意を強調し，Appraising に他の活動よりも高度な分析的技術と美的判断の発達を期待しているのである。なお，ここでの活動は，歴史的，文化的背景などの知識を交えながらの分析的活動も含む。また，Appraising を採用する際，Appreciation という他の候補が挙がっていたが，教師や音楽専門家に，音楽に対する消極的な関わりを連想させることを懸念したため，MWG は Appraising がもつ積極的な含蓄を好んだとしている。さらに，3 つ目の到達目標に Appraising を採用した意図として，生徒の音楽に対する理解を評価する手段としての機能を挙げている。そして，そのような技術や判断は，生徒が記述したものや議論において評価されるものとしている。

以上から，Appraising という概念は，「聴衆としての聴取」の改名であり，我が国の鑑賞活動に相当するということができるだろう。MWG は，Appraising を採用することによって，理想とする鑑賞活動の有り方を提示しようとしたのである。また，Appraising は，音楽との分析的関わりを強調するものであり，我が国の鑑賞活動における課題と通じる点があるように思われる。

Appraising が到達目標として採用された理由は，以下のようにまとめられる。

- 音楽を単に聴くだけでなく，解釈し，評価することを含む，積極的聴取の意を強調するため。
- 演奏や作曲などの他の活動と比べて，より高度な分析的技術と美的判断の発達が期待されるため。
- 鑑賞活動における生徒達の記述や議論が，生徒の理解を評価する手段となり得るから。

## Ⅲ　Keith Swanwick の Appraising 観

### (1)Keith Swanwick の Appraising に関する見解

ナショナルカリキュラム音楽作成にあたり，Swanwick は到達目標が単なる活動になっており，音楽を通して何を学ぶべきかを明らかにしていないと一貫して批判している[14]。Swanwick がナショナルカリキュラム音楽に影響を与えたとされる点は，到達目標の名称に関することであり，彼の代案はそのまま法案化された。彼は，最終報告書に提示された Appraising に関して，聴衆として聴くという意味をもちながら，それが暗示するものは多方面にわたるとしている[15]。そして，Appraising は，全ての活動において起こるものであると指摘しつつも，彼が以前の研究で，演奏や作曲時の聴取と注意深く区別するために用いていた「Audition」にあたるとしている。彼の理論では，Audition において決定的な美的経験が起こるとしており，Audition は音楽が存在する中心的な理由であり，音楽教育における本質的で普遍の目的であるというものである[16]。

また，彼は，Appraising は単に音楽に注意を向けるだけでなく，音楽の本質を批評するという点から，Appraising を「analysis」と言い換えることができるものとしている。そして，MWG が示した Appraising の対象となる音楽的要素の一覧は，単なる要素の分類であり，その一覧には意義がないと批判している。しかし，Appraising は音楽の批評を含んでいるという点から，Appraising は音楽には学ぶべき知識が存在するということを暗示するものであるとし，音素材，特徴的な表現，形式，価値という Appraising の 4 つの種類を提示したことは特筆すべきである。Appraising の 4 つの種類は以下である[17]。

1 音素材に関する appraisal がある。すなわち，音色，テクスチュア，音域，音の強さの印象についての‘サウンドスケープ’という行為のような，響きの操作についての appraisal である。
2 特徴的な表現に関する appraisal がある。すなわち，作品の全体的雰囲気，その印象的レベル，もしくは単一のフレーズの特定の表現についての appraisal である。
3 構造的な関係に関する appraisal がある。すなわち，豊かな表現が別の表現に関係する仕方や，音楽的効果の変化の仕方，また，それによってどのように我々の注意を惹き，聴き続けさせるのかについての

appraisal である。

4 作品の価値という点での appraisal がある。オペラもしくはジャンルとしての前進的なロックに対して賛成か反対かという単なる偏見ではなく，ある音楽的出会いとして重要な，個人的聴衆としての認識であり，素材，特徴的な表現，構造における appraisal によって確立された理解である。この段階での音楽的経験は，最も主観的で特異的なものである。

また，Appraising は言語的に行われるだけでなく，作曲や演奏などの実演においても行われるという点を指摘している。

このように，Swanwick は Appraising に関する見解を述べているが，後の研究では，作曲，演奏，鑑賞という 3 つの音楽的活動について述べる際，鑑賞については「Audience-listening」という言い回しを使っている。また，彼の教え子である Cecilia Cavalieri Franca が開発した Audience-listening の規準を，音楽的理解に対する評価の指標となるものとして推奨している。Franca の Audience-listening の規準は以下である[18]。

**表 1　Franca の Audience-listening の規準**

| |
|---|
| レベル 1－生徒は，音の質や効果を認識し，音の強さのレベル，音程，音質，音色，音組織の明確な違いを知覚する。これら全ては技術的に分析されるのではなく，音楽の特徴的な表現や構造的な関連性についての説明はない。 |
| レベル 2－生徒は，規則正しい拍や変動する拍を知覚し，特定の楽器や声音，グリッサンド，オスティナート，トリルなど，素材の扱いに関する工夫を確認する。しかし，生徒は，これらの要素を，音楽の特徴的な表現や曲の構造に関連づけたりはしない。 |
| レベル 3－生徒は，楽曲の特徴的表現，全体的な雰囲気やムード，あるいは感情の質について，おそらく音楽以外の何かへの連想や視覚イメージを通して，言葉で説明する。生徒は，音素材の扱い方による変化，特に速度や音の大きさの変化を表現の豊かさのレベルの変化と関連づけることができる。しかし，音楽の構造的な関連性について注意を向けることはない。 |
| レベル 4－生徒は，馴染みのある拍子組織，音の連続，繰り返し，シンコペーション，ドローン，音の集合体，オスティナートを確認する。生徒は，慣習的な音楽の身振りやフレーズの形や長さを知覚する。 |
| レベル 5－生徒は，構造的な関係を知覚する。音楽の身振りやフレーズが反復し，変換され，対称的に配置され，あるいは結合される仕方を知覚する。生徒は，ある楽曲の中で，例外的に起こったことや予期しなかったことは何なのかを確認し，音楽の特徴の変化を，楽器や声音の音色や音程，速度，音の大きさ，リズム，そしてフレーズの長さに関連づけながら知覚する。変化の度合いについて，それが緩やかに起こったのか，あるいは突然に起こったのか，ということをはっきりと聴き分けることができる。 |
| レベル 6－生徒は，音楽を特定の様式の脈絡の中に位置づけ，独特のハーモニーやリズムの屈折や変化，特定の楽器あるいは声の音質，装飾，変奏による変換，対称的な中間部など，音楽をその音楽らしくしている作風における技術的な工夫や構造的な手段への気づきを表す。 |
| レベル 7－生徒は，それぞれの独特な音楽の特徴的な表現や，様式に一貫性のある音楽形式の関係を生み出すために，音素材がどのように構成されているのかに気づく。そこには個人的な洞察と自律した評論による価値判断がある。生徒は，音楽を価値あるものとする気持ちを明確に示す。自ら選択した音楽活動に対して個人的に深い関わりをもっていること，あるいは，ある特定の楽曲，演奏家，あるいは作曲家に対して，持続したこだわりをもって関わっていることがその証となる。 |
| レベル 8－その人は，十分に発達した音素材に対する感受性や，音楽表現について見極め，音楽の形式を理解する能力をもっているために，音楽の価値について造詣の深い理解をもっていることが明らかである。そこには，象徴的な対話の意味深い形式の 1 つである，音楽への系統的で熱心な取り組みがある。 |

## Ⅳ　イギリスにおける Appraising 観に対する Swanwick の見解の位置づけ

Swanwick の見解を位置づけるにあたって，MWG の最終報告書，MWG によるガイドブック，RAMP の研究における Appraising をおさえる。

2 章で言及した MWG による Appraising は，以下のような図式に表される

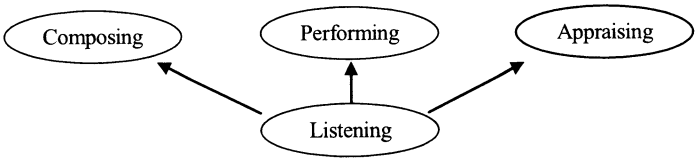


**図1　MWGによる見解**

MWGは，全ての活動における聴取の重要性を指摘した上で，Appraisingを，聴衆としての立場から，他の活動よりも音楽に分析的に関わることのできるものとして提示した。音楽に関する用語を用いながら議論するなどの言語的活動を重視していることは，Appraisingの到達レベルの詳細にもよく表れている（資料1）。

これに対し，法案化されたナショナルカリキュラム音楽において，到達目標1：Performing and Composing，到達目標2：Listening and Appraisingという2つの到達目標が示され，MWGの考えとは異なるものとなった。そして，第1次改訂のナショナルカリキュラム音楽（1995）において，同様の到達目標が保持されたことを受け，MWGは，自ら出版した教師のためのガイドブックの中で独自に説明している。そのガイドブックでは，Listeningの意味を「選択的聴取」として改めて解釈することで，ListeningとAppraisingをあくまでも1つのものとして捉え，到達目標2は聴くことを通して音楽に分析的に関わることであるとした。

**図2　ナショナルカリキュラム音楽（1995）に対するMWGの解釈**

また，このガイドブックの中で，MWGはRAMPによるAppraisingの定義をナショナルカリキュラム音楽（1995）と全面的に一致するものとして紹介しているが，MWGのこの解釈とRAMPによる解釈には若干の違いが見られた。RAMPによるAppraisingの定義は，全ての活動において行われる音楽を理解するための手段であるというものであり，Appraisingは，音楽を目的をもって聴くとき，音楽について考えて反応するとき，音楽について積極的に考えるとき，音楽について選択をし，その判断を評価するとき，経験や知識を用いるときなどに起こるとしていた。RAMPによるAppraisingは，以下のような図式に表される。ここでのListeningの意味は，聴衆という立場による音楽との関わりを指していると考えるのが妥当である。

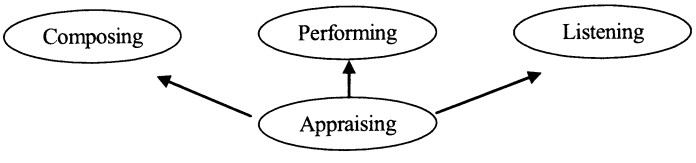


**図3　RAMPによるAppraisingの定義**

以上のように，MWGによるAppraisingの見解は，ナショナルカリキュラム音楽を解釈するために変化してきているということができる。特に，RAMPの見解には，Appraisingを手段として捉えるという点で独自性が見られた。

一方，Swanwickは，MWGのAppraisingという到達目標について，何についてAppraisingをするべきなのかが明らかでないという点を指摘しつつ，Appraisingの指標となるものとして4つの概念的カテゴリーを示した点において，他には例を見ない見解を示したということができるだろう。また，Appraisingを，聴衆として音楽を聴くことを示すAudience-listening，分析的性質を示すAnalysisであるとする2種類の捉え方をしていた。

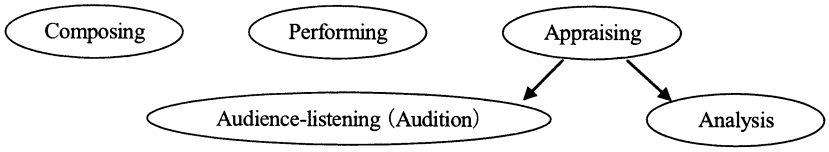


**図4　MWG の Appraising に対する Swanwick の見解**

しかし，Swanwick の過去の研究によると，音楽との関わり方としては，作曲者，演奏者，聴衆（Audition）という 3 つの立場があり，分析的作業（Analysis）はどの活動においても起こるものとしている。このことから，Swanwick の本来の考えは，RAMP の図式と同様のものであったと考えられるが，MWG の Appraising を解釈するにあたり，聴衆としての聴取，分析的作業という 2 側面を Swanwick は指摘したのである。

以上のことから，Appraising に対する見解には，Appraising を「聴衆としての聴取」という限定された捉え方と，全ての音楽活動における音楽を理解するための手段であるとする捉え方の 2 とおりが存在したが，Swanwick 本来の考え方は後者であったということができるだろう。

## V　おわりに

本稿では，Swanwick の Appraising に関する見解を考察したが，Swanwick の影響は改訂されたナショナルカリキュラム音楽には及んでいないとされる。今後は，ナショナルカリキュラム音楽が改訂されるにあたって，Appraising がどのように捉えられていったのかについて明らかにしていきたい。

## 引用・参考文献

1) *Pitts, S., A Century of Change in Music Education :Historical Perspectives on Contemporary Practice in British Secondary School Music*, Ashgate, 2000, p.161.
2) Ibid.
3) Ibid.
4) 井本美穂「英国の"Music in the National Curriculum"の成立過程に関する研究」広島大学大学院教育学研究科修士論文，1996。
5) Pitts, S., op.cit.
6) 高須一，塩原麻里「イギリス」『「教科等の構成と開発に関する研究」研究成果報告書（15）音楽のカリキュラムの改善に関する研究－諸外国の動向－』国立教育政策研究所，2003，pp.17-28。
7) 塩原麻里，高須一「英国の音楽科教育におけるカリキュラムの変遷とその背景－ナショナル・カリキュラム成立の過程とその導入－」『東京学芸大学紀要　第 5 部門』56 号，2004，pp.1-16。
8) Flynn, P., Pratt, G., Developing an understanding of appraising music with practicing primary teachers, *British Journal of Music Education*, 12(2), 1995, pp.127-158.
9) Pratt, G., Stephens, J., *Teaching Music in the National Curriculum*, Heinemann, National Curriculum Music Working Group, 1995.
10) Pitts, S., op.cit.
11) 梅比良麻子「イギリスのナショナルカリキュラム音楽導入時における教師のためのガイドブックに関する研究－Appraising に着目して－」『教育学研究紀要』（CD-ROM 版），第 56 巻，2010，pp.1-6。
12) Department of Education and Science, *Music for ages 5 to 14－Proposals of the Secretary of State for Education and Science and the Secretary of State for Wales－*, London, HMSO, 1991.
13) Ibid., pp.14-15.
14) Swanwick, K., Open Peer Commentary: Musical Knowledge: the Saga of Music in the National Curriculum, *Psychology of Music,* 20., the Society for Research in Psychology of Music and Music Education, 1992, pp.162-179.
15) Swanwick, K., *Music Education and National Curriculum (The London file: papers from the Institute of*

*Education* ), the Tufnell Press, 1992, pp.13-16.
16) Swanwick, K., *A Basis for Music Education* , NEER－Nelson, 1968, p.43.
17) Swanwick, K., 15), op.cit., p.15.
18) スワニック，キース／塩原麻里，高須一『音楽の教え方　音楽的な音楽教育のために』音楽之友社，2004，pp.147-149。

**資料1　Music Working Group による法的拘束力のない Appraising の到達レベル**

| レベル | 到達の記述 | 例 |
|---|---|---|
| 1 | 生徒達は以下のことが可能であるべきである。<br>a) ダイナミクス，速度，拍子，音色，構造の点から，音楽，静寂，環境音を認識し，反応する。<br><br>b) 様々な方法で生み出された音を聴き，それについて話す。 | <br>音楽に合わせて動き，静寂で立ち止まり，音楽が静かな時に忍び足で動く。<br><br>音の一覧表で，物音を比較し，話す。<br>大きい／静か，短い／長い，同じ／違う，始まる／止まるなどの言葉を使用する。 |
| 2 | a) 音楽を注意深く聴き，音程，長さ，リズムを含む音楽的要素に反応したり認識したりする。<br><br>b) 表現豊かな目的で，聴いたことのある多様な音楽の中で音楽的要素が用いられる方法を説明するために簡単な用語を使用する。 | 音楽の音程が高くなると身体をのばし，低くなると身体をまるめる。<br>生徒の名前に合わせて手拍子をする。<br><br>様々な祭りや式典のために，音楽がどのように適切な雰囲気を作り出すのかについて議論する。<br>より大きい／小さい，より高い／低い，より長い／短いというような言葉を使用する。 |
| 3 | a) 旋律を含む，音楽的要素の中の相違に反応し，区別する。<br><br>b) 様々な形式や文化，過去や現在の多様な音楽を聴き，その性格や顕著な特徴を認識する。 | よく知っている歌の音程をなぞるために手を上げたり下げたりさせる。<br><br>簡単な用語で，生徒達が歌ったり踊ったりしたことのある舟歌やリールの歴史的，社会的，文化的背景について話す。 |
| 4 | a) 音楽的要素をより正確に区別するようになる。<br><br>b) 多様な音楽を聴き，その中の音楽的要素の使用の効果を評価し，単純な用語で好みを表現したり根拠を示したりする。 | 打楽器アンサンブルの多様な楽器を聴き，認識する。<br>ガムランの旋律の終わりに低いゴングを聴く。<br>ダンス組曲の動きを比較する。<br><br>テレビアニメで使われた音楽の適切さについて議論する。 |
| 5 | a) 多様な音楽的形式の中の音色，テクスチュア，続いているリズムや旋律のパターンの違いを区別する。<br><br>b) 多様な音楽的形式のいくつかの知識を認識し，説明する。 | 聴きなれた旋律が内声やバス声部に現れる時，その旋律を認識する。<br>アフリカのドラム演奏における独特なリズムを認識する。<br><br>フォークソングや聴きなれた歌のポピュラーな編曲について議論する。 |
| 6 | a) 要素を認識し識別する。要素は，単純な和声，複雑なリズムや旋律のパターンや，幅広い声楽や器楽におけるそれらの使用を含む。 | ポップミュージックの作品の和音の変化を認識する。<br>インドネシア，インド，アフリカの音楽で使用されているリズムパターンを認識し，区別する。 |

| | | |
|---|---|---|
| | b) 多様な時代や文化の幅広い伝統やアイデアが記録されているいくつかの楽譜を用いて，聴いたことのある音楽の知識を説明する。 | ロマン派の音楽を認識し，それについて話す。<br>現代音楽の作品を聴きながら楽譜を目で追う。 |
| 7 | a) 多様な時代や文化の音楽における固有の音色，テクスチュア，和声，パターンを分析する。<br><br>b) 聴くことを通して，音楽的アイデアを適切な記譜に関連させ，楽譜や解説に関して，音楽の記譜や構造，形式的な慣習の知識について説明する。 | スコットランドのフィドル音楽を認識し，それについて話す。<br>転調を認識する。<br><br>古典的なメヌエットやトリオの楽章の演奏の中で楽譜を目で追い，その構造や演奏法について話す。 |
| 8 | a) 音色，テクスチュア，和声的旋律のパターンから，特定の時代もしくは文化において聴かれる音楽の共通の表現形式を認識する。<br><br>b) 聴いたことのある多様な形式の音楽について，批判的な評価をしたり，分析したりする。 | ブルース作品の真の演奏を聴き，認識し，議論する。<br>ミュージックコンクレートの例を認識する。 |
| 9 | a) 音楽的性格を認識し，より複雑な音楽的アイデアを適切な記譜に関連づける。<br><br>b) 聴いたことのある多様な形式，時代，ジャンルの音楽について，より詳細で批判的な評価や分析，説明を行う。 | ホモフォニー，ポリフォニー，ヘテロフォニー，モノフォニー，旋律と伴奏のような音楽的テクスチュアを認識する。<br><br>20 世紀の音楽の例を聴き，その作曲家の名前を考え，そしてそのような選択をした理由を交えながら，その音楽の主な性格について話す。<br>同じ作品における 2 つの演奏を比較する。 |
| 10 | a) 音源や楽譜を使用しながら，幅広い複雑な音楽作品における顕著な性格を正確に定義する。<br><br>b) 幅広い形式，時代，ジャンルから，そして多様な表現形式によって，聴いたことのある音楽についての正しい判断，批判的な分析，説明を行う能力を示す。 | 音源や楽譜を参考に，コンピュータを使用して生み出されたり加工されたりした音楽について話す。<br>ポップ音楽を聴き，その和声やリズムの緊張や弛緩を議論する。<br><br>授業，学校もしくはプロのコンサートで聴いた作品の詳細な批評を書く。 |

(Department of Education and Science, *Music for ages 5 to 14－Proposals of the Secretary of State for Education and Science and the Secretary of State for Wales*－, 1991, pp.42-44より，訳出)